海老名のエレミヤ、内村のエレミヤ……エレミヤ評価の違いから見た両者の比較[1]

20031007　演習：日本とアジアのキリスト教
キリスト教学Ｍ２　岩野祐介

海老名弾正、内村鑑三の二人は、明治～昭和期の日本を代表するキリスト教指導者である。両者とも、キリスト者でありかつまた日本に生きる者であることの意味を真正面から扱い、「日本的キリスト教」の成立を目指した、と言ってよい存在である。その意味では、根本的には共通するところの多い両者である、と言えるのではないか。

但し、両者の立場には多くの相違があったことも確かである。そこで今回は、前期演習で主として扱った旧約聖書範囲から、エレミヤ書について両者が述べたものを取り上げ、それぞれの特徴と共通・相違を比較してみたい。内村にとってエレミヤ書は特に非常に大事な書であり、エレミヤは彼の敬愛する人物の一人であった。彼がそのような感情を抱くに至った事情については後述するが、そのような内村のエレミヤ評価と、やはり当時を代表するキリスト教指導者海老名弾正の評価とを比較して見ることは、決して無駄なことではないだろう。内村と海老名は、キリスト教・教会観・救済観、人間観、政治・戦争観等においてはかなり異なっている。内村は自らの信仰を「古い福音」と呼んだ[2]が、海老名は自由主義神学を積極的に取り入れ、新神学論争を巻き起こした。無教会の内村に対して、海老名は当時の日本において最も影響力のある教派の一つであった日本組合教会の、これまた最も影響力のある牧師の一人であった。また内村は日清戦争期には義戦を認めていたが、日露戦争期からは完全な非戦論者となった。それに対して海老名は戦争肯定論者であった。

今回比較するにあたって、海老名弾正については前期に扱ったテキスト「基督教本義」の第五章「預言者エレミヤ」[3]を、内村鑑三については『内村鑑三全集２９』より「ヱレミヤ伝研究」[4]を、それぞれ用いた。海老名の「基督教本義」は明治３６／１９０３年の著作であり、内村の「ヱレミヤ伝研究」は大正１５～１６／１９２６～２７年にかけて『聖書之研究』誌に連載されたものであるので、書かれた背景となる世界情勢、また国内の社会情勢には若干の隔たりがある。

また、内村の「ヱレミヤ伝研究」が連続講演の記録を文章に起こしたものであるのに対して、海老名の「預言者エレミヤ」は最初から論文として書かれたものであること、さらに内村がエレミヤ書を単独でかつ部分的に取り上げ「ヱレミヤ伝」としたのに対して、海老名はキリスト教全体の成立・発展史を念頭に置いた総合的な論文、『基督教本義』の一部分としてエレミヤについて触れていること等は、比較する上で注意しておかなければならないであろう。内村には、海老名の『基督教本義』のように、彼自身によってキリスト教の歴史・教義をある程度コンパクトにまとめたような著作は存在しない。内村は聖書解釈においては常にその全体を考え、細部にこだわって躓いてはならない、ということを述べているが、彼自身の研究においては、あらかじめ全体的・総合的なものを構築した上で細部へと進め検証するよりも、まず部分に注目し、そこから全体的なものへと発展させるようなやり方を好んだようである。まずこの点においても両者の違いは際立っていると言えるだろう。

しかし研究対象となるエレミヤ書には確定されたテキストが存在しているのであり、従って時期が違うからといって対象自体に変化があるわけではない。またいずれも、両者がある程度のまとまった分量を用いてエレミヤについての考察をしたものであり、両者のキリスト教信仰のあり方、神観、人間観等がそこにあらわされていると言ってよいであろう。海老名は彼のキリスト教の「本義」、すなわち本当の意味を説き明かすために著したのであり、一方内村に関して言えば、これはいわゆる３度目の回心と再臨運動を経過した後の著作であり、彼の信仰が最終段階に達した後のものである。それ故、これらを資料として両者の比較をすることにはある程度の妥当性があると考えてよいのではないか。

なお、海老名の論については前期の演習中取り扱われているので、ここでは内村の「ヱレミヤ伝研究」をもとに、必要に応じて海老名と比較していく形で進めることとする。

まず内村鑑三の「ヱレミヤ伝研究」についての概観を記しておく。前述の通り、これは内村がエレミヤ書を単独で取り上げた連続講演を、彼の聖書研究会の会員である石原兵永が筆記したものである。『内村鑑三全集２９』に添えられた澁谷浩の解題によれば、この連続講演は全１３回行なわれたようであるが、その内エレミヤ書６章・７章についての講演筆記については、筆記者石原の「止み難き事情」により、廃棄されることとなった。また最終回は第９章についての註解である。もちろんエレミヤ書は全４２章の大書である。しかし内村の連続講演は９章までの解説で終ってしまっているのである。

ここで内村はエレミヤ書の概要について２回をかけて講演している。第１回はエレミヤの出自について、第２回はエレミヤが活動した当時の時代背景・政治状況についてである。そして第３回から第１１回まで、エレミヤ書１章から５章までと、８・９章を個別に註解している。海老名はエレミヤの為したこと全体について語ったが、内村はその言動の一つ一つに注目したのであった。但しこの論文では、海老名が細かい註解をしてはいないことを考慮し、内村によるエレミヤについての概説的な部分を主として取り上げた。

内村はまず第１回の冒頭で、彼がエレミヤを非常に高く評価していることを明らかにする。曰く、「ヱレミヤはユダヤが産んだ最大の預言者である。」「ヱレミヤが解らずして聖書は解らない。又イエスキリストは解らない、従って基督教は解らない。」[5]等である。また高く評価する理由を、「宗教は儀式ではない、道徳である、信仰である、服従であるとは彼が特別に高調した所である。」「ヱレミヤは…イスラエルの信仰を、人として達し得る最高点にまで進めた。…旧約の教は…ヱレミヤに由りて其発達の極に達し、之を土台として新約は起り、福音完成の途が開かれた」[6]と述べている。エレミヤが偉大な預言者であることについては海老名も異存ないであろうが、内村のように「最大の預言者」とまでは述べていない。海老名によればエレミヤの功績とは「…国家滅亡に由て却てエホバ教の本質を発明し、其祭式的なるを一変して霊的となし、其律法的なるを一変して精神的となし、其国家的を一変して個人的となしたる…彼は宗教の生命を国家の上に見出すこと能はずして、個人の衷情と尊厳なる確信とに於て発見することを得た」[7]ことである。

この両者の、エレミヤに対する評価の差については、内村の個人的体験が影響している可能性がある。内村の生涯のキリスト教経験には三度の大きな節目があった。彼は自らそれを三度の回心と表現している。その中でも特に大きな意味を持つ経験であった二度目の回心は、彼の在米中アマースト大学において起こった出来事であった。これは内村がアマースト大の総長シーリーから「内に顧みる事を止めて十字架上のイエスを仰ぎ見よ。神の手に全てを委ね、安心して自らの成長を待て」と諭され、贖罪信仰を確立させたという出来事である。この、アマースト大学に編入する直前の、内村がマサチューセッツ州エルウィンの精神薄弱者施設で彼が看護人として働いていた時期[8]に、彼ははじめて本格的にエレミヤ書を読んだのであった。エルウィン時代は内村が札幌以来のピューリタン的・律法主義的キリスト教に疑問を抱き始めた時期であり、彼は他者のために奉仕すれば奉仕するほど、それが利己的動機に由来するような気がしてならない、との悩みを抱いていた。そのような時期に、「徹底的に神に頼る」ことを主張するエレミヤ書を読んだ内村は、非常に感激したのである。またこの時期は、内村が故郷から遠く離れた海外において、望郷心と結びついた愛国心をたぎらせていた時期でもあった。そのため、バビロニアをロシアに、ユダヤを日本になぞらえて考え、神に頼ることが国を救う唯一の道である、というエレミヤの言葉に内村は大いに感じた、という側面もあった。[9]以上のような個人的体験のために、内村がエレミヤを特に敬愛する預言者となしたことは、考えられることである。

一方、海老名の筆致は抑制の効いたものであり、個人的体験の有無などは感じさせない。ここには前述したような両書の性質の違いもあるであろうし、また海老名の場合は序論において「具眼達識の人々」「科学的頭脳を有する青年学生」に対しキリスト教を弁証することが著述目的の一つであることを挙げている[10]ので、科学的な客観性を重視したということもあるであろう。なお内村による学者・学生の評価は決して高いものではなく、もちろん内村も近代科学とキリスト教が矛盾する等と考えてはいないが、その調和のさせかたは海老名のそれとは異なっているようである。大雑把な言い方をすれば、海老名はキリスト教が科学的に説明可能であり、両者は同次元において矛盾しないと考えているようなところが

あるのに対して、内村はあくまでも科学の次元とキリスト教の次元とを分けている、といった印象を得られるのではないだろうか。

内村は先の言葉の中で、「宗教は儀式ではない、道徳である、信仰である、服従であるとは彼が特別に高調した所である。」と言っている。この、「服従」という表現は注目に価するだろう。海老名が語る神の愛にはどこか楽天的な響きがあるのに対して、ここでの内村の「服従」という言葉はずいぶん厳しいものであり、これは内村の人間観を反映していると考えられる。この内村の人間観については後述する。

内村は続けて「儀式を無視した言で之（エレミヤ書４:４を指す、筆者注）よりも強い者はない。若しエレミヤが今日の羅馬天主教会又は英国聖公会又は独逸ルーテル教会の内に現はれたならば、彼等は一日も彼の彼等の間に留まる事を許さないであらう。」[11]と内村は述べる。このような儀式批判、神殿・祭司批判については海老名も共通している。無教会の内村ほど徹底してはいないかもしれないが、プロテスタント教会の海老名もまた儀式それ自体については否定的であった。「エレミヤは神殿よりも何よりも社会道徳を以て最も重要なるものと思ふた」「自己の徳を省みずして徒に神殿を頼むは迷信であり妄信である」[12]といった言葉からそれは見て取れるであろう。

なお、祭司ということのとらえ方については、内村と海老名で若干の違いがある。内村はエレミヤが祭司の家に生まれたことを強調し、彼の行為は内側からの祭司階級を改革であるとした。そしてエレミヤこそが本物の祭司、理想の祭司なのだ、と考えた。内村は祭司を「神と人との間に立ちて、神を人に紹介し、人を神に執成（とりなす）の聖き職」[13]、つまり言葉本来の意味での祭司、と考えたのである。それに対して海老名は、エレミヤは特権階級たる祭司階級をなげうって預言者となった、と評価している。海老名は当時の社会的実情をもって祭司ということを解釈したわけである。

内村は「ヱレミヤ伝研究」第２回の冒頭で、エレミヤの生涯を「殊に又彼の異常なる苦難殉教の生涯は、彼の後に顕はるべきナザレ人イエスを思はしむるのである。彼は生涯を通じてイザヤの所謂『悲哀の人』であった。」と表現し、イエスのそれと比較している。一方海老名がエレミヤとイエスの共通性について直接言及したのは「神の恩恵は人事を推して察せられぬ程である…エレミヤが五十年の永年月、屈せず、撓まず、倦まず、疲まず、憤らず厭わず、猶太民族の悔改して善良の民族たらんことを勧告し、忠言したる其の心情は、則ち此神の恩恵の霊能に駆られたるものに外ならない、…此恩恵が基督に至つて実に空前の光明を放つた」[14]という表現くらいである。しかし海老名も「預言者エレミヤ」に続く第６章「倫理的エホバ教の原理」においてエレミヤの苦難の生涯について触れており、義人の艱難ということの意味を見過ごしていたわけではない。

内村は続く第３回で、エレミヤ聖召（召命）の場面について力を入れて述べている。一方の海老名はエレミヤの召命場面について特に詳しく語ってはいない。内村は二十歳の青年エレミヤが「神によりてユダヤ一国のみならず万国の興敗までも預言すべき命を受けた」ことを、「若し此の事が事実でないならば、是は将さに狂気の沙汰である」と言う。そして、エレミヤがまず召命に際して戸惑い、一度はそれを断ろうとしたことを挙げ、「其処に最も人間らしき心情の発露が見える」と言う。エレミヤは冷静に自分の力量を見つめられる人間だったからこそ「我は幼少によりて語ることを知らず」と神に対して述べたのであり、このことは「彼が決して己が力を過信し、徒に妄想に耽る人物に非ずして、最も常識と謙譲とを備えたる人らしき者であつたことを証拠立てゝ居るのである」と評価しているのである。そして内村は、モーセ、イザヤ、パウロといった「神に選ばれし真の預言者」の聖召の場面には必ずエレミヤ同様、彼らが自らの力量を顧みて戸惑い召命を辞退する描写があると言い、この常識・謙譲こそはエレミヤが真の預言者であるしるしである、と言う。そこで神は、そのように気後れするエレミヤに対して、「エレミヤが自己の力によってこの大任に当たる」のではなく、「唯神の遣はし給ふところに往き、其の命じ給ふ言を語りさへすればよい」ことを説き、ここに至ってエレミヤも「神に余儀なくされて遂に起ち、神の命じ給ふ如く其の任務を受くるに至つたのである」。

ここにもまた、内村の人間観がよく現れているように思われる。偉大なる預言者といえども、いやむしろ偉大なる預言者であるからこそ、彼は自らの限界・無力さを実感している。そしてそのような無力な人間が生きていくためには神にすがる以外なく、人間が何かを成し遂げることができるとするならば、それは神の導きにおいてのことである、という人間観である。これは上記アマースト大での二度目の回心の出来事において彼が得た信仰であり、その後の彼のキリスト教理解の土台となって揺らぐことはなかった。

なお、これに対して、偽の預言者というものは、「未だ神の言をうけざるに自ら神の召をうけしと思ひ、我こそ真の預言者、我は之を以て起ち国を救ひ世を改めんとし、我によらずしては社会も国民も改革されずと考ふるの輩である」と内村は言うのである。内村は自らに頼ることの傲慢さを、特に近代の人間の特徴として批判することが多く、例えば 1925／大正 14 年の「近代人の神」[15]など、そのテーマで書かれた文章も数多い。海老名は「預言者エレミヤ」の末尾で「彼れは宗教の生命を国家の上に見出すこと能はずして、個人の衷情と尊厳なる確信とに於て発見することを得た」と言っており、海老名は内村よりも、個人というものの信頼度に関しては高い、と言えるであろう。

従って、内村にとって重要なのはまず神に頼ること、神にたちかえることであって、道徳の問題はそれに付随することがらなのである。第６回の末尾で内村は「宗教は儀式ではない、道徳である。勿論である。けれども如何にして其清き道徳を行ひ得るか。信仰の道である。ヱホバに帰り来る事である。…汝先ず神と義しき関係に入れ、さらば汝は凡ての事に於て義しくある事が出来るであらう。」[16]と述べている。これに比して海老名は「人の罪悪を看過して、人其ものを善良にせんとするの力は、恩恵其ものでないならば、果たして何んであろう。」[17]と述べているが、「罪悪を看過」「恩恵」といった表現は、内村のような厳しい自己理解とは異なるように思われる。内村はここで海老名が「善良」と表したことを、もう少し厳密に、神に対する善良さ（信仰）と人間同士の関係における善良さ（道徳）とに分けて、前者を上位に置いたのである。これに比べると、「倫理的エホバ教」といった表現を用いる海老名は、この点に関して内村よりも曖昧なのではあるまいか。海老名の言う神の恩恵には楽天的な響きがある。内村もまた神の恩恵や愛を説かない訳ではなく、最終的には全てを神に委ねるべきというのであるから、ある種の楽天性をそこに見出すことは可能である。しかしそれは人間の無力さの自覚というところで、ワンクッションおいての楽天性なのである。

こうして人間の無力さを説く一方、続く個所において、内村は前述の楽天性につながり得る、神の偉大さについて説いている。それは預定（予定）の問題である。「ヱレミヤの信仰に由れば、彼の預言者たるは神の預定に由る」[18]「…神が予め定め、彼（エレミヤ、筆者注）の生まれざる先より神の御意の中に存せるものであるとの信仰である」[19]と内村は述べる。そしてこのことの説明として、内村は「ミケランゼロが一塊の大理石の前に立ちし時、既に予め造らるべきモーセ又はダビデの像の理想が彼の心中に存在せざりしと誰が断言し得る乎」[20]という言い方をしている。彫刻家でさえまだ形にはなっていないものを心の中に思い描くことはできるのだから、まして万物の造物主である神は、たとえまだ形になっていなくとも、世界の姿をその御意の中にもっていておかしくないではないか、というのである。これはいわゆるカルヴァン的予定説とは異なり、神の経綸を認める、といった意味での、広い意味での予定説であると言えるだろう。従って内村によれば「…我は偶然に目的なく此世に存在するに非ず、我が生まれしは予め神の定めし大なる御計画の結果にして、…我は真の個人であり我に代りて我が目的を果たすべきものは他にない。」[21]ということになるのである。

「我が目的」を見出した「個人」は、もはや無力な人間ではないであろう。その目的を果たすべく、力強く歩み始めるのではあるまいか。たとえ社会に受け入れられなくとも、エレミヤが預言者として活動を続けられた秘密はここにあると内村は考えているのであり、それは彼自身が決して楽ではない伝道活動を続けられたこととも重なっていくものだったのではないだろうか。そして、ここに於いて内村の見解と、先に挙げたように海老名が「…エレミヤが五十年の永年月、屈せず、撓まず、倦まず、疲まず、憤らず厭わず、猶太民族の悔改して善良の民族たらんことを勧告し、忠言したる其の心情は、則ち此神の恩恵の霊能に駆られたるものに外ならない…」と述べたこととが重なってくるのである。但し罪悪観、あるいは人間の無力さという点でワンクッション置いている分、内村の見解は重さを増していると言ってよいかもしれな

いのであるが。さらに愛国者、憂国の愛国者としてのエレミヤを高く評価する点でも両者は共通する。また両者とも強烈な愛国者である。愛国者でありながら、キリスト教信仰のために社会に受け入れられない彼等の立場は、預言者たちと重なるところがあったのである。しかし、その人間観の違いが、両者の政治観・社会観を相違させることとなり、それは戦争に対する態度の差ともなって、海老名をして昭和時代日本の軍国主義へと加担させる結果を生んだのかもしれない。

---

1 海老名は「エレミヤ」、内村は「ヱレミヤ」と表記しているが、ここではエレミヤに統一した。本文中では、内村の文章を引用した個所に限り「ヱレミヤ」と表記するが、その表すところは「エレミヤ」と表記する場合と全く同様である。

2 例えば明治 40／1907 年「旧き福音」など。

3「基督教本義」明治 36／1903 年、日高有隣堂。ここでは『近代日本キリスト教名著選集　基督論集・基督教本義』日本図書センター刊、に収録された復刻版を使用。引用に際しては、仮名遣いはそのまま、旧字体の漢字のみ、新字体に改めた。

4「ヱレミヤ伝研究」大正 15／1926 年、『聖書之研究』306〜312 号。『内村鑑三全集 29』岩波書店刊 353〜403 ページに収録。

5『内村鑑三全集 29』353 ページ。

6 同上。

7 海老名弾正『基督教本義』65 ページ。

8 1885 年のことである。

9 内村鑑三『余は如何にして基督信徒となりし乎』（鈴木俊郎訳、岩波文庫）150 ページ。

10『基督教本義』3 ページ。

11『内村鑑三全集 29』354 ページ。

12 引用２箇所とも「基督教本義」55 ページ。

13『内村鑑三全集 29』355 ページ。

14「基督教本義」61 ページ。

15「近代人の神」大正 1４／1925 年、『聖書之研究』294 号。『内村鑑三全集 29』岩波書店刊 7〜8 ページに収録。

16『内村鑑三全集 29』380 ページ。

17「基督教本義」61 ページ。

18『内村鑑三全集 29』365 ページ。

19 同上。

20 同上。

21 同上。